

過去の排外主義の歴史から学ぶ

岩脇 彰

いわわき あきら
1960年12月31日生まれ
『三重の戦争遺跡』(2006年 つむぎ出版 共著)
『シリーズ戦争遺跡①学校・地域に残る戦争のつめあと』
(2010年 汐文社 共著)ほか

はじめに

排外主義とは、国の政策や、誤った情報が原因となつて、自分の命や生活、家族、そして地域社会のためと信じ込んで、他者の平和的生存権(平和に生きる権利)を侵害することである。その際、「これが自分の家族や社会を守ることになる」という攻撃者の間違つた正義感が正確な判断を阻害し、加害者である意識が弱いことが大

きな問題になる。

過去には多くの過ちがあるが、ここでは植民地責任とハンセン病の強制隔離政策から考えてみたい。

一 木本事件

木本事件は一九二六(大正一五)年の正月に三重県南部の、現在の熊野市木本で起こつた。今年でちょうど百年になる。ささいなきっかけから地元住民が朝鮮人労働

者を襲撃し、二人の朝鮮人が犠牲になつた。事件は今も地域でタブー視されているが、心ある人たちによつて歴史が掘りおこされ、若い世代への語り継ぎも進められている。その取り組みから学ぶことが、これから排外主義を克服していくヒントになる。

1. 事件の背景

当時、木本に最大二百名の朝鮮人が働きに来ていた。山地の多い日本では、村と村が山で隔てられていることが多い。隣の村に行くのに、江戸時代には山に道をつけて峠を越えた。近代になると技術が進み、より早く、より楽に隣村に行けるように、山にトンネルを掘つた。その危険な工事をしたのは朝鮮人労働者が多かった。

一九一〇(明治四三)年から日本は三五年間、朝鮮を植民地にした。その間、「在朝日本人」が大日本帝国の法律などに守られ、朝鮮で裕福な生活をした。逆に、朝鮮人はそれまでの生活や土地を失つた。彼らの一部は生きるために日本に来た。あてがわれた仕事は土木作業や鉱山労働だった。膨大な数の朝鮮人労働者が日本の鉄道、道路、橋、トンネル、港、ダムや発電所などを作らされた。その頃に作られたインフラの多くは、今も私たちの生活を支えていることを忘れてはいけない。木本で

も、家族を含めて最大二百名の朝鮮人労働者が一九二五(大正一四)年から、木本と隣村を結ぶ木本トンネルを掘っていたのである。

木本事件が起こる二年四カ月前、一九二三(大正一二)年九月に関東大震災があつた。その時に国家権力によつて自警団が組織され、多くの朝鮮人が「不逞鮮人」として虐殺された。自警団の中には朝鮮での義兵闘争を弾圧した人も含まれていたことが、これまでの研究で明らかになっている。一九一九(大正八)年に朝鮮の民衆が植民地からの独立を目ざす運動を始めたが、日本では、彼らを「暴徒」「排日鮮人」などと表現した。朝鮮人に対する蔑視感是全国に流布し、木本でも醸成されていた。

2. 事件の経過

ささいな衝突は木本の映画館で起こつた。衝突の内容はいくつかの伝承があるので詳細を省くが、警察や地域の対応に不満をもつた朝鮮人労働者が、抗議のために木本神社の境内に集まって火を焚いた。集まった中には日本人労働者もいた。抗議のためだけに集まったのだが、町の中では「朝鮮人が襲ってくる」というデマが飛び、警察は在郷軍人会の出動を要請し、町長も自警団や青年